吉野なる　夏実の河の　川淀に
鴨そ鳴くなる　山陰にして

湯原王　巻三・三七五

やまと　万葉がたり

今年の5月、宮滝遺跡での発掘調査成果が公表されて大きな話題になりました。今回は、その吉野で詠まれた歌をとりあげます。

「夏実の河」の流れが淀んだところで鴨が鳴いているようだ、山陰に隠れて…と歌うこの歌にふれると、姿の見えない鴨の鳴き声が、山の向こう側から聞こえてくる情景が目に浮かびます。ここで歌われる「吉野なる夏実の河」とは、吉野町の菜摘地区のあたりを流れる吉野川のことと理解されており、その位置は吉野宮のあった宮滝のすぐ上流です。すぐ近くとはいっても、宮滝から菜摘地区はちょうど山陰になるような位置にあります。また、そこを流れる吉野川も蛇行しているため、水流の淀みである「川淀」が生じたのでしょう。

歌に詠まれる地形を以上のように理解すると、この歌はやはり宮滝の吉野宮で詠まれたと考えられます。歌の作者である湯原王は、天智天皇の子である志貴皇子の子にあたる奈良時代の人物です。彼が吉野に行ったとすると、736（天平8）年6～7月に行われた聖武天皇の芳野（吉野）行幸でしょうか。太陽暦にすると、ちょうど今ごろに歌われた歌かもしれません。山々に囲まれ、清らかな川の流れる夏の吉野で、宮滝から直接は見えない夏実から響いてくる鴨の鳴き声に心を寄せた、すがすがしい余韻の残る歌です。

さて、夏実（夏箕とも）は、江戸時代には既に吉野の名所として知られていました。「大和廻」（1696年）には夏実の詳しい場所が紹介された上で「夏箕は名所なり」と書かれ、「大和名所記」（1681年）や「大和名所図会」（1791年）には、湯原王のこの歌が夏実を紹介する歌として掲載されています。この歌は夏実の実景を詠んだ歌ではないのですが、実景が詠まれないからこそ、あえて「夏実ってどんなところ？」と、見に行きたくなる効果もあるのかもしれません。

（県立万葉文化館研究員・吉原啓）

【訳】吉野の夏実の川の川淀には鴨が鳴いているようだ。山の向こうがわに隠れて。

＝次回は9月5日予定